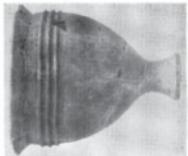
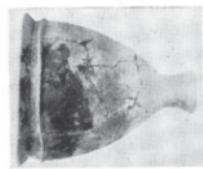


17



18



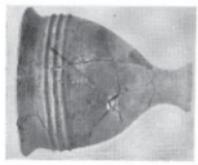
19



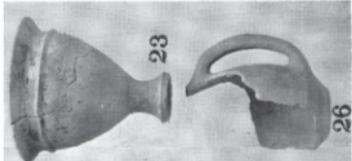
21



22



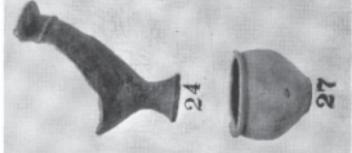
20



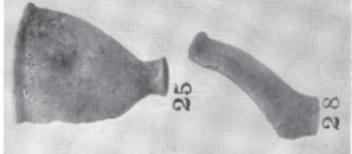
23



26



24



27



28

図版九 土器



29



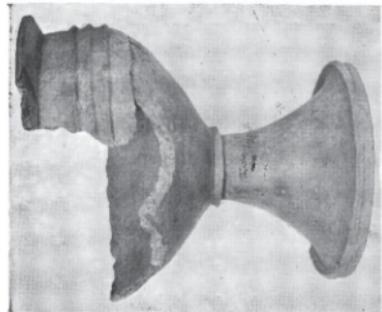
30



32



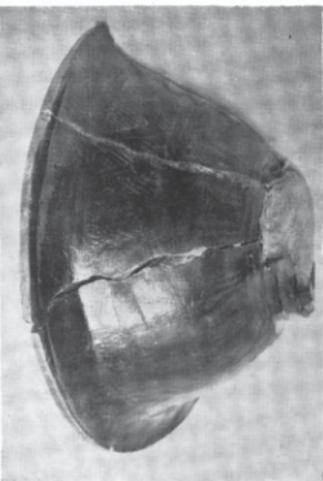
33



31

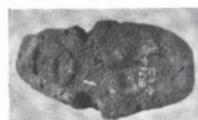


34



35

図版一〇 土器



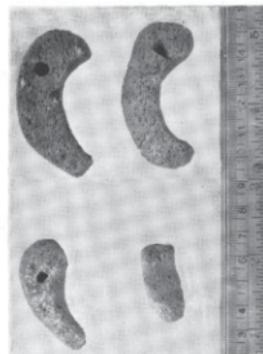
A



C



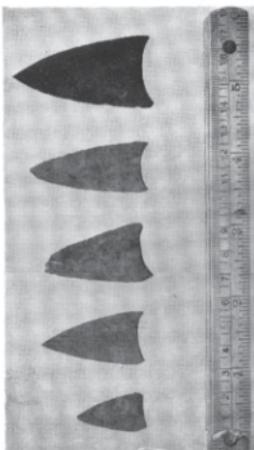
B



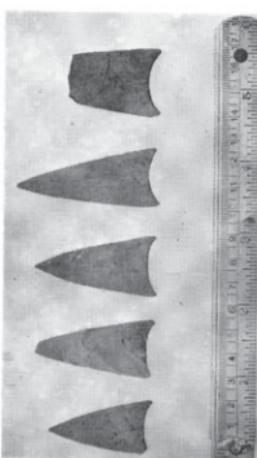
D

圖版一  
—  
舊石器

A



B



C

圖版二  
—  
石器

## 山ノ口遺跡

河口貞徳

(一) 山ノ口遺跡は鹿児島県肝属郡大隅町馬場山ノ口所落の山頭に位置している。背後には山地がせり、前には鹿児島湾を越えた深い港湾で、現在水田となつてゐる。海岸線に沿つて古江から佐多に至る県道が東洋を貫いて西南北に走つているが、遺跡の中心部は県道より西側海岸よりにある。

この地域は差士を除くと、非常に厚い砂層がみられ、地中で堆積したものと思われる。多量の砂鉄を含していて砂鉄帶と呼ばれている。遺跡の発見も昭和三十三年五月頃の東邦金属株式会社による砂鉄の採掘が動機となつたのである。

初期開墾は、昭和三十三年十二月より翌年正月にかけて第一次発掘を行つた。

次いで遺跡滅失の恐れ等のために、昭和三十五年四月二次発掘を行つたが遺跡が完全に発掘しきれなかつたおけではなく、昭和三十六年に至つて、呼び更替金屬の砂鉄採掘が開始されると、遺跡が絶え出土し始めたので、昭和三十六年五月第三次の発掘を砂鉄の採掘と並行して行つた。その後も砂鉄の採掘は進行して遺物の出土がみられたが、発掘室を行なう機会を得ず現在この遺跡は完全に失われた

## 附編 2

河口貞徳 1962 「山ノ口遺跡」『立正考古』  
第21号 立正大学考古学研究会



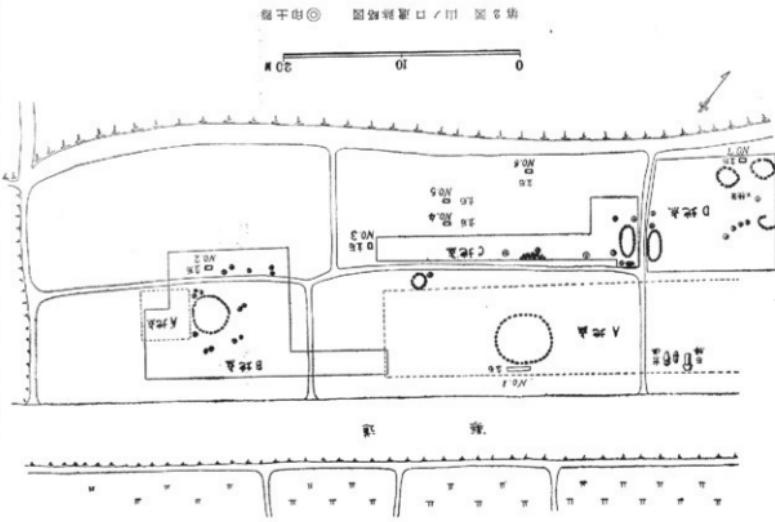
第1図 山ノ口遺跡立正考古

わけである。然し三次に亘る発掘によつて遺跡の大体は判明したことは至であつた。

第一次発掘の結果について、古代字及び鹿児島縣文化財調査報告書(注1)に発表し、第二次発掘の結果及び第三次至多調査の報告を参考した。  
 (一) 昭和三十三年の移転採掘場は遺跡の東側にある県道脇の地点と、南端小地點である。(第2図 A 地点、B 地点) この地点は遺跡の重要な位置を占めていたものと思われる。採掘当主者(註2)によると、東側に経石製い石板及び岩側等が一帯所に出土し、その西側面約 5m の県道脇の地点に經石疊の集散地が発見されている。経石裏面地は一側に約 1.5m の安山岩質の石柱が無数の状態で出土し、附近に多数の土器、経石製品等が出土している。その後の発掘状況から推定すると恐らく円形の配石地であつたものと思われる。(第2図 A 地点)  
 第一次発掘では、前記経石製圓盤の西側 10m の県道脇の地点に、経石渓による溝 3m の円形の配石を配し、経石製玉、粘板岩製の圓盤等の出土があった。(第2図 B 地点)  
 昭和三十六年の移転採掘は前回より大幅縮小で、ポンプを使用して機械的に採掘するものであったから、地表 1.0m 以上の深所まで及んでいる。

この採掘でも多くの遺物が発見されたが、特に注意すべきことは、立石を四箇所(註3)発見したことである。何れも 1 m 以上後前の石柱で、加工されたものであり、中には人骨と思われるようなものもあった。この立石が遺跡の一帯でからることは殆んど間違ないと思われるが、他の遺物との配置状況は不明である。(第2図)  
 第二次発掘は昭和三十五年四月五日より七日に至る三日前で、遺跡のは中央にあたり、第一次発掘地點(第2図 B 地点)の北側の地點である。遺跡の中央の辺に沿つて、N E 54° の方前に 2 m × 1.8 m のトレンチを設け、2 m 間に九区区分して南側より 1 区～9 区と L<sub>1</sub>、南側 5 区域を I トレンチと L<sub>1</sub>、北側斜面を II トレンチと名づけた。後このトレンチを南側へ 4 m 延長してⅢトレンチと、Ⅳトレンチとして南より 1 区とした。

又、北側では 9 区より 8 区の半ばに亘る点から西方へ屈折して 3 m × 4 m の IV トレンチを設け区分して更より 1 区とした。  
 遺跡の出土状況は層位的には第一次発掘と同様がみられず、旧跡とと思われる地表下約 1.5 m の砂層表面に遺物配列が見られた。B 地点に近いⅢトレンチ及び、



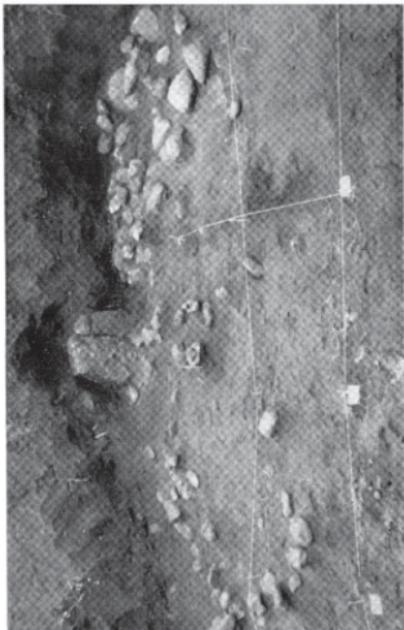
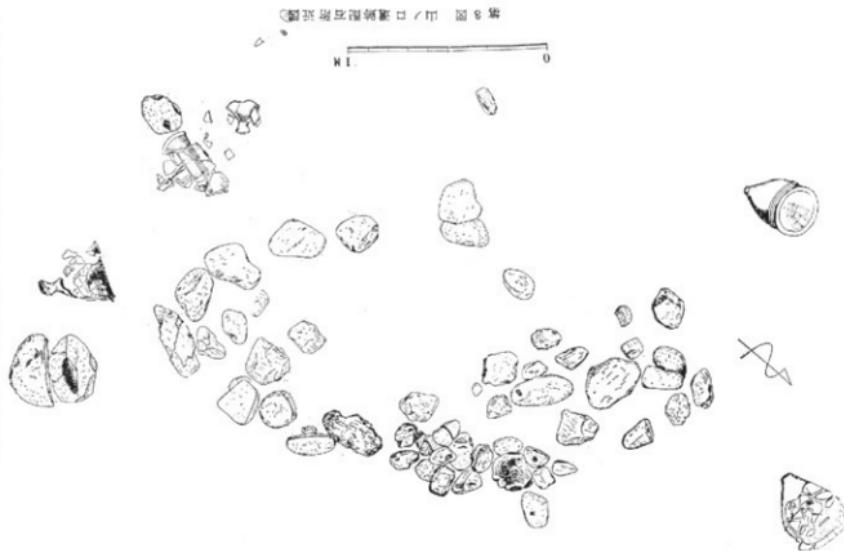
## (6) 山ノ口遺跡(鉱口)

I レンチの3区までは遺物ではなく、発掘区域の中央部より北東へかけて遺物が見られ、I レンチ 5 区に砾石層の集積地があり、これに沿つて豊臣壁の破損度のひどいもの（第5図6）がみられ、南西側にやゝ離れて I レンチ 4 区に、変形小形豊臣土器（第5図5）経石集積地を示すには II レンチ 6 区に變形土器の破片及び砾石製陶玉が出土している。これらの土器は砾石集積地を埋んで配置されたものと想われるが、砾石集積地はレンチの底側へ延びており、この部分は昭和三十三年度の砂浜採掘地点（第2図A 地点）に屬しているため金属をしそることが出来なかつた。

発掘区域の北東端には、II レンチ 9 区より IV レンチ 1 区へかけて横円形構造の砾石層の配石があり、直径2.84m、高さ1.60m、傾斜はSW 26.5°。配石に用いた礫は加工したものもあり、東側の列の中には中央に貫通する孔を有し、火然を受け焼けたものもある。原石の長軸方向、重側には配石面より3.0cmの間隔をおいて3.4cm×2.4cmの網状石に、1.9cm×7.0cmの横円形で深さ1.0.5cmの凹穴

○ 圖 6 山ノ口遺跡(鉱口) 砂浜採掘地

M 1



D 地区立石と網状配石圖

この附近では丹織りの経石磚二面が出土し、凹石の西側には鶴丸土器と呼ぶ土器が出土している。

第三回は昭和三十六年五月五日より七月までの三日間移動の採集作業と並行して行った。森林探査と共に遺物が出土したので、遺跡の鑑定を恐れて発掘を実施したのである。査定の地點は演説の北東部に位徳し、第二次試験開拓と、昭和三十三年の砂漠探査地點(第2回C地点及びA地点)に隣接して行った。発掘は土石礫層より東方へ12.2m、南東より東方へ10.2mの範囲で行なった。前二回と同様に石礫による砾石配石が開拓場所に見らる、その一つは発達地帯の角の魚柱である。

同上

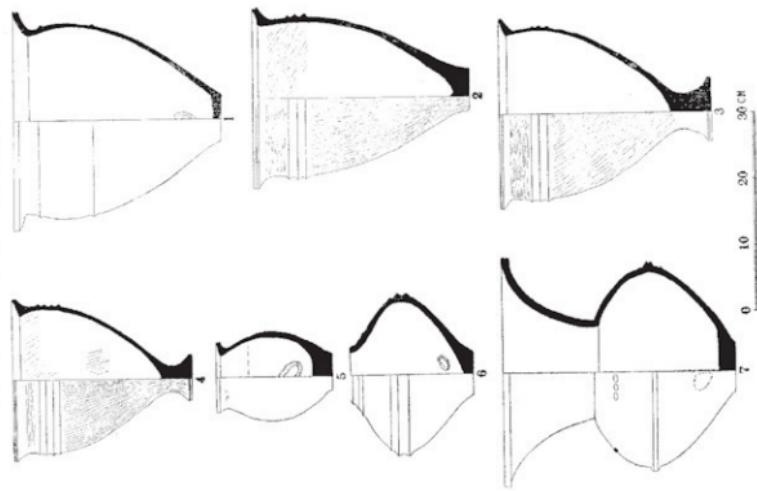
地点の堀状化石と並行して、同様な鋸形葉状化石を出土し、北西方面に鍾乳土器及び、小形鍾乳土器一例つつを配している。  
この化石と対峙点の北側に錐狀化石二箇所が発見して並び、その中間、西より立石の出土を見た。基部より頭部が細、小さいか、基部の幅 3.7 cm、厚さ 2.5 cm、高さは 7.8 cm の角柱状の立石で、下部より 2.5 cm 間の断面にえぐりを入れておき、このえぐりの下端部あたりから土中に埋められていたものと思われる。地表に露出した部分も、西北面の海岸に傾いた東面は風蝕の要因が少ないと想つた際分は風蝕を著しく受け、逸跡に留めた東面は風蝕の要因が少ない。

(第 5 図説) 2 箇所の錐狀化石の前側には平行形の錐形土器一箇、画面を思ひ起せる絆石加工品、曲矢状の加工工具を配している。

震裂りの一箇の錐狀化石は、東北側よりの中央前面より稍、東南側に偏して出土し、この部分より各々 1 m 余の間隔をもつて、西北に對張する錐狀化石二箇、鍾乳土器二箇が、鍾乳土器を中央にして配列し、化石に最も近い鍾乳土器の下部からは、

土器の出土状況について三面の発掘を通して柱はされる点は、破損が少なく、  
土器の表面が真面目を受け、  
破損したものとまとめて出土する事、出土の際の土器の上面が真面目を受け、  
鑿削土器の場合には底盤が脱落し、下面が剥離を受けて鏡面土器は底盤付着部が  
残存していること、鏡面土器は破損のため不明となつたものを除くと、それも  
形態に於て孔をあけてあること等である。例外としてはC地点出土の舟形壺  
の大型土器と、  
リ地點出土の研磨された小形形態土器に孔をあけてあつた点があ  
げられる。

三回にわたる先端部、頭部骨幹によつて切離した断面を結合すると、頭部度立。当時の姿形につくられた大小の邊縫合骨片前でもあり、各骨片には立方石を施する場合があり、時には岩塊、或いは行燈、凹石等を施したものもみられ、土器、鐵玉、石礫等を配属することはすべての結合を通じて行われている。砂歯の初期発育から半断層すると、述の範囲は、青面筋は地點が崩れ、北東側は地點より貢献度を失す地点と思われ、東側部は骨道を構へして、北西側は導管に平行した出を示す。後で第2回に示すところは大体還暦の令和2年(2020)4月に撮影した写真である。



(二) 逸跡は現在水田であるために、地表は平坦であるが、内部構造をみると、地盤は西面方向にあなたの頭は後へ向かつて横傾斜を示し、大体四層を数え、これに極端に、火山灰等の逐次した層が合まっている。

第Ⅰ層 灰層 2.5 cm ~ 3.5 cm、砂質の土壁で紹土となつており、この層の下部に鉛化鉄の富化層が厚削さまであるが、以て断続している。

第Ⅱ層 褐色土層、紹土の直下の層、砂質多く混ざった土質で、厚さも 3.0 ~ 4.0 cm でよく發達している。この層の中には点々と火山灰の堆積層を含んでいる。

第Ⅲ層 黄褐色砂層、これは一部では下層の褐色砂層との境が明顯でない部分もある。一部には 3.0 cm ~ 4.0 cm の厚さに発達した部分もみられる。

第Ⅳ層 褐色砂層、3.0 cm ~ 4.0 cm、下部の砂層よりへの所移層である。この層の下部には火山灰の堆積層（コラ層）（註 \*）の特徴的断続層を含んでいる。

第Ⅴ層 基盤、砂質を含む細灰層で非常に厚く、悉く 1.0 m を超えるものと思われる。遺物は多くは、この間の上層に集つており、一部の遺物が下層の層の内部にくくい込まれているものがある。

右の出土状況から見て、この器の表面が地表を形成していた時代に、遺物は形成されたものであろう。

鷦 鳩土器 ここに挙げる土器は C 地点出土の土器である。（第 5 図、昭和三十五年四月の第二次発掘によるもの）

底口彫刻土器（第 5 図 7）胴部の著しく張った錐頭形の部体に、口縁部が研削形に開き、大く直立した頭部をつけた臺で、底部には前述口唇状の凸部を一條めぐらしている。底部は比較的厚く、安定した土器である。民窯仕上げで、内面も滑らかに仕上げ、ところどころ擦痕など見られる。同器形のもので割込内面に青黒色の彩色を施したものもある。色調は紅褐色を帯び、焼成は悪く、胎土には砂質及び礫母片をふくんでいて。

登窯土器（第 5 図 6）肩の張った土器で、胴部と窓部に折曲面三角形の凸部を二枚乃至数枚めぐらしている。平底で中心部が高く、窓心は梢度高い。窓部以上を欠くが、誠いほど地表及び C 地点出土の古器をめぐらした登窯土器（註 5）と類似した形かも思われる。ただこの土器は質の強っている点が他と異つていて、注意される。

小形圓窓土器（第 5 図 7）底部が丸く、窓部はかるやかな曲線をしており、口縁部は（次に屈曲している。内面は崩れの跡などもついている。

織田土器(第5回3,4)この遺跡で最も多い焼成土器である。罐形の胴部に、も実装台を付け、口縁部はく状に外反し、腹部に3~4条の凸筋をめぐらしている。刷毛目仕上げである。

施土器b(第5回2)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。頭部に他の頭型土器に見られる断面三角形の凸筋を三条めぐらし、口縁部はく状に外反している。平底盤形土器はこの遺跡では二例目であり、南北剖面は極めて稀である。刷毛目仕上げである。以上にあげた各土器は土質、色調等が共通で、環母を含むしている点も同じである。

施土器c(第5回1)頭部が平坦の土器で、口縁部外反しており、断面三角形の凸筋を口縁部に近く一条、驚れて胸部に一筋めぐらしている。外側及び内面の上部三分一までは丹塗し、口縁部上面及び外面は常に觸感の手法を用いている。土器の仕上げは薄く、精巧で、他の土器と著しく異なる感じを与える。胎土は粒子がこまかいで、内面の色調は黄白色を示している。北九州にみられる城ノ越IV式(鉢6)と見よよい。

以上のC地点出土の土器群は、出土状況からみて同一時期に属するものと思われる。又B地点及びC地点出土の土器と同一型式と認められる。その時期については須佐式に近く、学生中期まで古さうに見える。板<sup>1</sup>、板<sup>2</sup>式との併出關係からみると、學生中期の後半と思われる。板<sup>1</sup>、板<sup>2</sup>式土器の出土はこの遺跡では一例であつて、その形態、或いは手法等が先づ例に一筋にみられる土器と異つてゐる点からみると、北九州から移入の終品のようだと思われるが、板<sup>1</sup>式(註7)に若干の出土例があり、最近発見された月辺部全般町の墓地貝塚でも、その碎片を発見しているので断定は出来ないが、その出土状況をみると、他の遺物に比べて、その出土量が極めて少ない点は注意すべきであろう。

その他の遺物、C地点出土の濃物としては、粘程滑製の磨製石器、磨石製の山玉一箇及び、長さ約7.5cmのまるい棒状の加工品が出土している。

(注1) 三次にわたる発掘の結果この遺跡は、大崎幅2.0m余長さ5.0m余の地域につくられた学生中期の遺構であつて、その内容は、いくつかの壁状配石の組み合せである。この遺跡が大堀占の神賀子野新開にあることからして、この乎野施作に象嵌するものであつたかを推定することは困難な問題である。

この遺構が何を意味するものであるかを推定することは困難な問題である。

同様の類型もみとめられない現在起論を出すことは早すぎることもあるが、私の実験と見て述べるなりば、漢代の事況、内容から考へて、儀軸に関する祭祀の行われた遺跡ではないかと思う。

銅鏡(第5回1)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回2)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回3)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回4)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回5)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回6)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回7)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回8)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回9)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回10)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回11)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回12)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回13)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回14)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回15)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回16)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回17)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回18)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回19)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回20)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回21)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回22)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回23)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回24)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回25)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回26)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回27)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回28)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回29)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回30)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回31)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回32)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回33)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回34)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

銅鏡(第5回35)胸部に稍くくらみをもつた、深い窓型土器である。

# 図 版





①

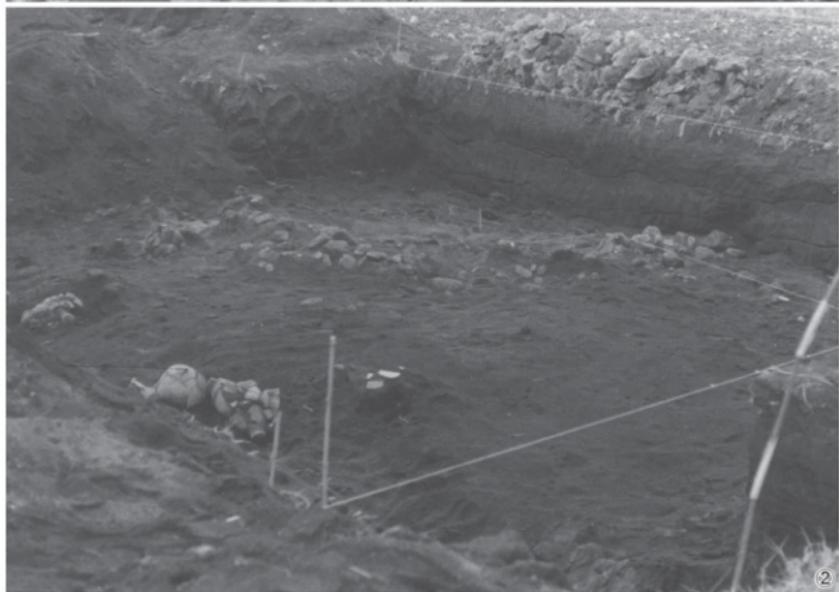


②

①調査当時の遺跡遠景（南東から） ②調査当時の遺跡遠景（南西から）



①



②

①B地点Ⅱトレンチ調査状況 ②B地点Ⅰ～Ⅲトレンチ調査状況



①

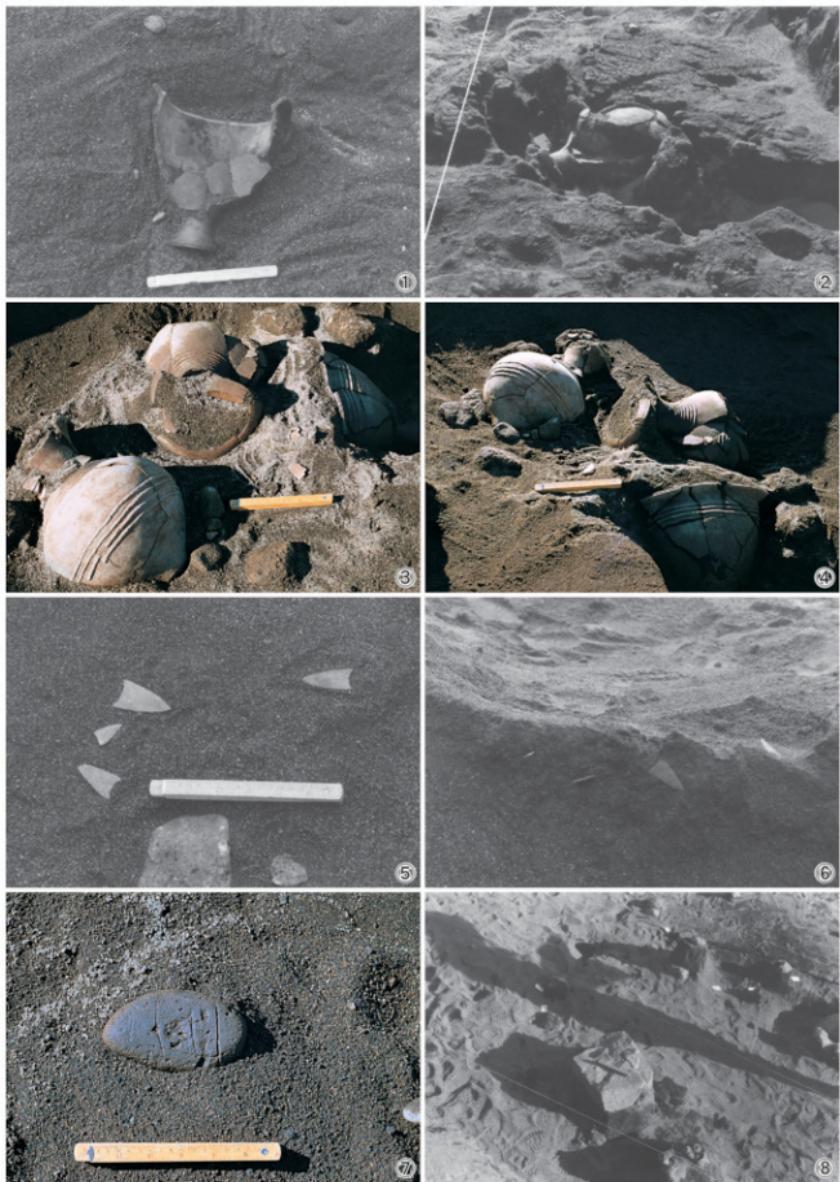


②

①B地点IV トレンチ拡張時調査状況 ②B地点環状配石検出状況



①②壺・壺（1・9）出土状況 ③④壺・壺（3・13）出土状況 ⑤壺・壺（7・12）出土状況  
⑥壺（4）出土状況 ⑦壺・壺（14ほか）出土状況 ⑧壺（2）出土状況



①壺(2)出土状況 ②壺(11)出土状況 ③④壺・壺(6・8・10)出土状況  
⑤10の直下出土石器 ⑥1の土器付近出土石器 ⑦軽石製品(30)出土状況 ⑧板石出土状況



①



②

①C地点環状配石検出状況（北東から） ②C地点環状配石検出状況（南東から）



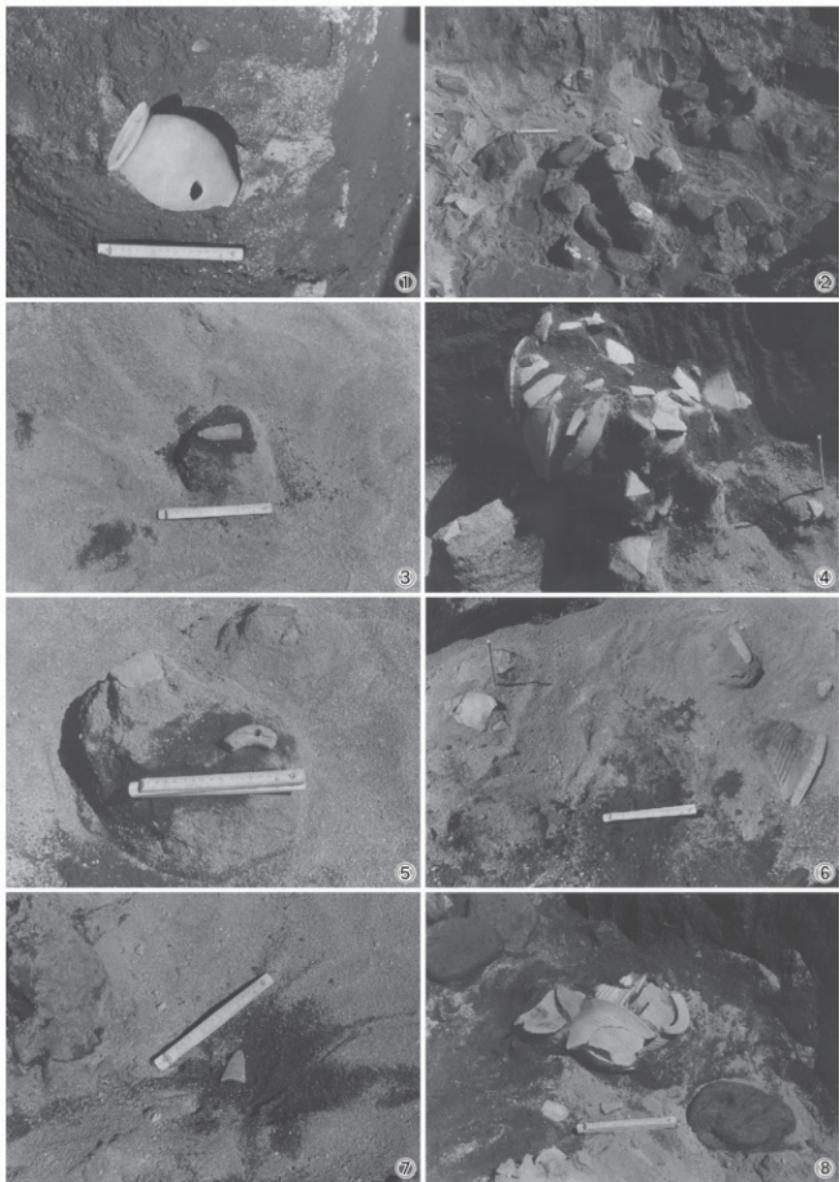
①



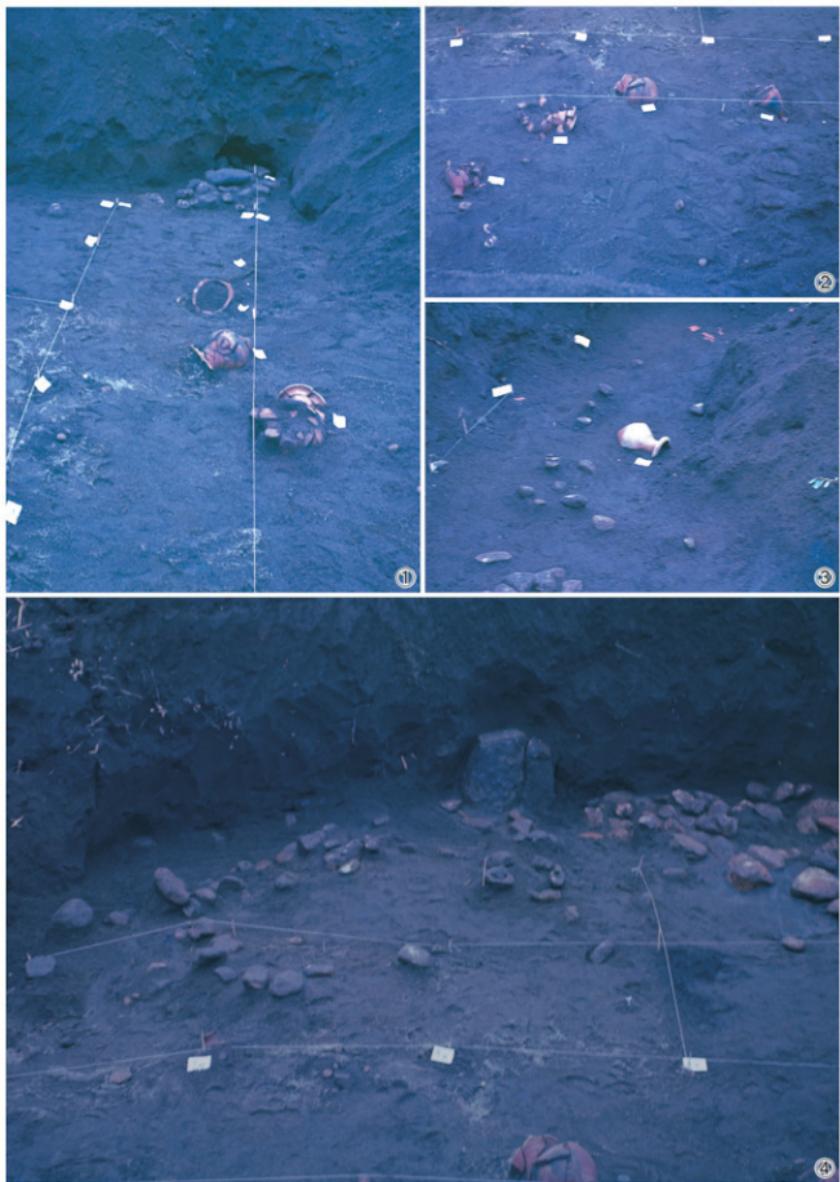
②

① C 地点環状配石検出状況（南から） ② 壕（40・41）出土状況

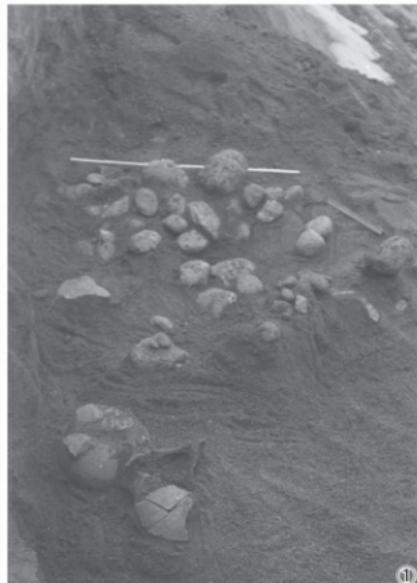
図版 8  
C 地点遺物出土状況



①壺(45)出土状況 ②Iトレーンチ5区軽石集積地検出状況 ③軽石製品(52)出土状況 ④壺(46)出土状況  
⑤軽石製品(51)出土状況 ⑥壺(44)出土状況 ⑦石盤(48)出土状況 ⑧壺(43)出土状況



①②裏・壺（53・55・59ほか）出土状況 ③壺（54）出土状況 ④環状配石及び板石検出状況



① 軽石集積地検出状況 ②・③ 板石取上状況 ④～⑦ 発掘調査風景

